

フツサールにおける存在の意味

星 揚 一 郎

一 本論の目的

対象や事態を把握することばがいかなる働きをしているかを探究することは、古来、哲学の主要な関心事のひとつであったと思われる。ましてや、学の営みそのものが、ことばによつてなされ、ことばによつて記述・保存せざるをえない以上、認識とことばとの関係はいつそう複雑な様相を呈してくる。フツサールにおいて、当該の問題を扱ううえで、鍵となるのは「意味」の概念であつた。「表現は意味をもち、その意味を介して対象に関係する」と、フツサールが繰り返し語っていることにも「意味」の特殊な働きが垣間みられよう (28, 87, 89, 91, 93, 119)。¹⁾

以下、議論をすすめていくうえで、標題に掲げた「存在の意味」(ontische Bedeutung) がとくに重要な役割を果たす。この「存在の意味」は極めて限られた時期にだけ用いられている意味概念であり、具体的にフツサールの膨大なテキスト群のなかでも、一九〇八年夏学期の講義録、つまりゲツチンゲン大学での講義をもとに編纂された『意味論講義』(Hua. 26) にしかみられない。そのためか、従来「存在の意味」は単独ではほとんど問題にされることがなかった。たとえ問題となるにしてもハスベチエスとノエマとの橋渡しをする概念∨という補助的な役割しか「存在の意味」には与えられていない。例えば、ヴィレムスは「意味

論講義』の「存在の意味」によって「『イデー』のノエマ的な意味理論と『論理学研究』の意味理論とが明らかかな連続性のうちにあることが分かる」と示唆するにとどま^③っている。そのほかベルネやゼーツァーも、それぞれ「存在の意味」を「ノエマ」の前段階として示唆してはいるものの、積極的に語ろうとはしていない^④。

そこで、このような傾向に抗して拙論では次のような展開で論をすすめて行きたいと思う。第一に『論理学研究』の意味概念である「スペチエス」の内容を確認する。第二に「存在の意味」が構想される必然性と「存在の意味」でフツサルが言わんとすることを提示する。第三に『イデー』第一巻における「ノエマ」と「存在の意味」とを対比することによって、「ノエマ」に「存在の意味」が吸収し尽くされてしまわないことを示し、「存在論の意味」が単独で考察されるに値する意味概念であることを論じる。

あらかじめ若干のことを示唆しておく、第三段階の結論は、フツサルが「意味」をあらわすのに用いている各々の語の語源からしてすでに明らかである。つまり、「スペチエス」がラテン語の「見る」(specio)に、「ノエマ」がギリシア語の「見る」(noeo)にその源を持つのに対して、「存在の意味」にはギリシア語の存在^⑤という語が含まれている。もちろん「ノエマ」には「見られたもの」から派生した「思念されたもの」という意味があることも、あるいは「ノエマは意識に内在的に超越している」という超越論的現象学固有の考え方も承知している。また、「高次の言語表現作用や思惟作用をも含むいっさいの作用は『対象』を客観化する表象作用に基づけられている」というブレンターノから継承した思想は、もはやフツサル現象学の常識である。われわれはこれを曲げようとしていたのではない。しかしながら、純粹に表象を基盤とした主観の働きだけから「存在の意味」が構想されているのではないことは、テキストから明瞭にうかがえる。

ここに、「スペチエス」や「ノエマ」に対するのは異なるフッサールの関心が含まれているように思われる。

二 スペチエスとしての意味

本論の主題である「存在的意味」の特徴をより明瞭に呈示するために、「スペチエス」と称される『論理学研究』での意味概念をあらかじめ確認しておきたい。

周知のごとく『論理学研究』では、フッサールは日常の言語表現の中に例を求めて議論を始める。それと同様に『意味論講義』でもこの方針を踏襲して次のような例を挙げている。「表現は、ひとつの同じイデアの統一態を意味する。例えば、ドイツ語のライオン(Löwe)は何かを意味しているが、その意味は、語る働き、意味する働きといった作用の多様性に対して同じである。『ライオン』(“ein Löwe”)という表現は、何度でも語られうるし、しかも同じ意味でそれは理解されうる」(31)。この「ライオン」という表現に就いては、ここでなされたように端的に語として機能している場合にも、目の前にライオンがいて原的な直観に基づいている場合にも、もしそうであればその直観が全体的であっても部分的であっても、そうした作用性質(Qualität)の相違にかかわらず「ライオン」の意味は変わらず、ひとつである(Vgl. 87)。

敷衍して語れば、想像によって作用性質をいかに自由に変更してみたとしても、それらの作用に「共通するイデア的契機」(Gemein)として「イデア的抽象によって取り出されるもの」が「スペチエス」にほかならない(87, Vgl. 36)。このとき、意識作用から「取り出して」(entnehmen)おきながら、取り出されたものが実

的ではなくイデア的だというのは一見したところ不合理である。しかしながら、それが単に作用から取り出されたものではなく、取り出された複数のものを比較した結果「抽象して」得られたイデア性だとすれば問題ないだろう。この抽象を仮に第一の「イデアチオン」と名付けておこう。

逆に、もし意味が体験の実的な契機であるとするならば、事態はどうなるだろうか。そのように仮定すれば意味は体験全体と同じように「流動的かつ一時的」(32)であることになってしまう。すると、もはや意味のイデア性(客観性と同一性)は保証されない。したがって、意味は「作用でも、作用における実的契機でもない」「イデア的な統一態」(31)だと言われる。さらに、時間的な観点から言えば、「意味賦与作用が一時的な体験である」のに対して「意味そのものはイデア的な統一態であり、非時間的 (unzeitlich) である」(31)とされる。

このような「スペチエス」としての言語表現の意味は、明らかに単光線的に何かを見る√という場面を念頭において語られている。『意味論講義』では言語表現の「スペチエス」は「単独の黄褐色―契機 (Gelbbrann-Moment) における黄褐色スペチエスと同じように、あるいはそれと類比的に、スペチエス的な統一態は意味作用に個別化されている」(Vgl. 32, 34-142)と具体的に説明される。このように視覚に堪して意味が語られるときには、見られる対象をわれわれの視野に入れざるをえない。というのも、黄褐色のライオンを実際に見るときに、われわれは黄褐色の「スペチエス」を見ているのではなく、まさに実物のライオンを見ているからである。フッサールは、「黄褐色」のように、ライオンという全体なくしてはありえないような「非独立的部分」を「断片」(Stück)でなく、「契機」(Moment)と言う。加えて、この対象は実在しているようにいまいが全く問題にならないのだが、意味とそれが向かう対象との関係は、例えば、「黄褐色」

の「ライオン」への「浸透」(Durchdringung) という必然的・本質的關係であるとされる (Hua. 19 SS. 230 u. 282)。「スペチエス」としての意味と対象とはまさにこのような關係にある。ただし、再度指摘するが、志向された対象が存在しているかどうかは今問題はならない。ここで重要なのは、あくまでも意味が対象への方向を与えているという必然性である。

以上の議論により、第一に、フッサールによってスペチエスの意味が語られるコンテクストの下地には、表現のもつ「名指しの作用」(nominaler Akt) がモデルとしてあること、第二に、しかもその作用は単光線的に見るVというケースに基盤をもっていることが理解された。

三 存在的意思

前節において、表現が意味をもつこと、そして、このスペチエスとしての意味が「志向される対象」への方向を与えることが確認された。しかも、各スペチエスは必ずひとつの対象への方向を示すべきものであった。

引き続いてフッサールは、やや唐突に、このスペチエスの正当性を損なうことなくスペチエスとは異なる新たな意味概念を構想する必要性を説く。すなわち「作用や作用から取り出したスペチエスのなものには適合せず、むしろ対象的な側面で対峙しているもの(志向された対象)の相関者に適合するニュアンス (Sinn) も、意味にはあるように思われる」(35)という。このような第二の意味があるとすれば、ここで示唆されている新しい「存在的意思」とは何であろうか。また「なぜ、われわれは……イデー化された意識現象的な

契機としての意味と並んで現象学的な意味を想定するのであるうか」(116)。

『意味論講義』で「存在の意味」とは、最も一般的には「志向された対象そのもの」(35f., 37usw.)であると言われる。¹⁰⁾この基本形に具体的な個々の作用の形態を代入して言い直すならば、「いかにそれが意味されているかという、その仕方 (Weise) における対象性」(28. 36. 37)、「いかにそれが意味され、あるいはいかに思惟されているかという、その仕方において受け取られた対象」(38)といった表現がとられることになる。このとき、もはや言うまでもないことであるが、この「対象そのもの」は、もしそれが実在物であれば分解したり、加工したりできるような「対象自体」(Gegenstand schlechthin)からは区別されている。そして、必然的な帰結として、「存在の意味」は意識の作用形態の変化に応じて変わることになる。

スペチエスを説明する際に例示した「ライオン」という表現を再度挙げてみよう。この「存在の意味」の文脈では、「ライオン」という表現は、基本形に倣って「ライオン」として表現された対象性そのもの」と言い換えることができる。この言い換えから察しうるように、「存在の意味」が語られるときには、必ず、何かあるものに対して述定する作用 (Prädikativer Akt)、ないしは規定する作用 (Bestimmender Akt) の関与が念頭に置かれている。つまり、(別の主語であっても構わないが、例えば) 「これ (Dies) はライオンである」(S hapteal) という判断が単なる「ライオン」という表現の根底には隠されているのである。その構造は「黄褐色のライオン」という表現であっても同じである。この場合、主語である「ライオン」に対して、先ほどと同じく、述定する作用を介して「黄褐色」という述語規定を加えることによって「存在の意味」、すなわち「『ライオンは黄褐色である』と表現された事態そのもの」が構成された。つまり「これ」や「ライオン」は、後述して「増殖する」(forpflanzen) 述語づけの基体となりうるのである (vgl. 72)。

この基体を、フッサールは「判断の基体となる対象」(Gegenstand-wörter)と呼んでいる。

静態的・分析的な見方ではなく、逆に、発生的・総合的な方向で見るならば、まず、この「判断の基体となる対象」を構成することから「存在の意味」の「構成」が始まると言うことができる。したがって、①述定する作用の一部である名指しの作用によって判断の基体となる対象を構成し、②次いで基体対象以外のいっさいをそこへと引き込む名辞化(Nominalisierung)を通して、しかも、③そのうえでなされる「カテゴリー的反省」によってはじめ、^③「存在の意味」は対象となる(Vgl. 38, 85f.)。それゆえ、「存在の意味」は、「直観的」(intuitiv)に対して「比量的」(diskursiv)(75, 78, 80, 94, 104)とされる高次の対象性である。こうした「カテゴリー的反省」を第二の「イデアチオン」と名付けよう。

これまでのところで「存在の意味」が何であるかは把握できた。しかし、いかにして「存在の意味」がフッサールの関心に入ってきたかは未だ不明である。『論理学研究』に遡って「存在の意味」のルーツを求めてみよう。

『論理学研究』において、「存在の意味」は「カテゴリー的对象性」として、完全なかたちでないにしても考慮に入れられていた。「カテゴリー的对象性」は、対象を「AとB」といった具合に結合する作用、「AまたはB」と離散的に捉える作用、「Aの隣のB」と関係づける *beziehend* 作用などによって構成された対象性とされていた(Vgl. Hua. 19, S. 675 邦訳四卷一七一頁)。換言すれば、それは「Bin⁽¹¹⁾とDas, UndとOder, WennとSo, AllesとKein, EtwasとNichts...」(Hua. 19, S. 667 邦訳第四卷一六三頁)といったカテゴリー形式をともなつて構成される対象性である。具体的には、われわれは次のような表現を日常的に用いることができる。つまり「ライオンは百獣の王である」(判断)、「ライオンと獅子とは同じである」(同一性の

総合)、 「ライオンは(ネコより)大きい」(関係・比較)といった表現を用いている。⁽¹¹⁾

こうした「存在の意味」は、単光線的な表象、ないしは名指しの作用をモデルに要請された意味でも、素朴な述語づけの作用をモデルに要請された意味でもありえない。△見る▽という作用をモデルにした表象作用からは決して出てこない、複合的な言表をわれわれは現に用いている。すなわち、いくら眼前に見えるライオンを観察したところで「ライオンはネコより大きい」といった、ライオン以外の対象との関係をあらわす命題はでてこない。だが「北岳」と「槍ヶ岳」といった並べて観察することができるのではない対象相互の関係さえも、「北岳は槍ヶ岳よりも高い」と精密に比較表現することができるのだ。こうした言表が用いられ、理解されていることを解明するために、「存在の意味」はいわば基づけ関係の上から要請されたものと考えられる。⁽¹²⁾さらには、实在物に対応する存在者がないと思われる「丸い四角」(「四角は丸い」といった判断)や「ケンタウロス」といった表現も日常的に用いて、その意味を理解している。「存在の意味」を構想するきつかけとして、フッサールが日常言語の分析を常に念頭においていたことは、このことから明らかになる。ただし、基づけ関係のいちばん底辺にある表象の重要性を完全に無視することはできない。言うまでもなく、いつさい対象が与えられなければ表象からの類比で言語表現を語ることは不可能であるからだ。そして、もちろん「存在の意味」を構想する目的は原理的な関心からにはかならない。

四 存在の意味とノエマ

いままで考察してきた「存在の意味」と「ノエマ」(『イデー』第一巻で「知覚意味」とも称される意

味概念」とが重ねてみられる傾向の強いことは、あらかじめ冒頭で示唆しておいた。著作の時期からみても、その内容からみても、「存在の意味」を「スペチエス」と「ノエマ」をつなぐものと考えられることは、たしかに妥当であろう。というのも、『意味論講義』の内容は、一方では『論理学研究』をコンパクトにまとめたうえで『論理学研究』の後半を特に展開させた形になっているし、他方で『意味論講義』は『イデー』第一巻の第三編から第四編の「ノエシス—ノエマ論」の形成に不可欠な議論を含んでいるからである。事実、「全きノエマ」を「存在の意味」つまり「作用の諸性格プラス命題」例えば $\wedge X$ は D である \vee という断定、「ノエマの核」を「命題 $\parallel \wedge p$ であるところの $X\vee$ 」、「規定可能な X 」を「判断の基体となる対象 $\parallel \wedge X\vee$ 」と、両著作の術語をきれいに対応させることが可能である。だが、両者が重なるからといって「存在の意味」イコール「ノエマ」と短絡的に結び付けるわけにはいかない。あくまでも「存在の意味」は「カテゴリー的反省」の対象なのであり、 $\wedge S \wedge p$ デアル \vee 以外の形式も備えうる、本来は意味論の文脈においてのみ語られるべき意味概念だからである。もちろん「存在の意味」をたんに中継点として見るならば、シヨークースに展示された「ノエマ」という完成品^(二五)だけでことは足りるだろう。だがしかし、こうした見方からは文献学以上の広い哲学的な興味はわいてこない。

最も困難な問いが未解決のまままで放置されていることにこそ注目すべきである。認識する意識の作用と存在との関係はいかなるものなのか。なぜフッサールが『意味論講義』の全編を通して「現象学的意味」の脇にあとから鉛筆書きで「存在的」と補足していったのか。フッサールが新しい現象学的意味概念にわざわざ「存在的」という限定を設けた、その理由を考えてみなければならぬだろう。

一九〇九年に書かれた草稿には次のように記されている。「表象すなわち意味の本質には、対象的なもの

に關係するということが再び含まれている。ただし、表象は、今度は、作用でも作用スベチエスでもなく、作用からオン (on) として『取り出されうる』ものである (114a)。このギリシア文字で書かれた「オン」はいったい何を意味しているのであろうか。この「オン」については、「真ナルモノトシテノ存在 (ōus zynthēs)」、まず第一に、これが一切のカテゴリーの対象にとつてのタイトルでありうる (167) と、『意味論講義』では一箇所だけしか述べられていない。では、『意味論講義』において真理とは何か。一般的には、それは「全き明証的判断においてわれわれに与えられるカテゴリー的なもの」ないしは「命題的なもの」(89) といわれる。すなわち、少なくとも「単なる存在の意味」である「SハDテアル」(Sind) という形式において (117 118a)、その命題を構成する要素が明証的な直観に基づいて与えられている限り、真理はわれわれに与えられるのである。ここで、意味論の文脈で真理を「真ナルモノ」と言い換えているのはなぜか。それは、カテゴリー的に整合していれば、もはや八原的に与えられる√という意味での明証は副次的に捉えられうるということを示唆するものと思われる。そして、その際、カテゴリー的なものには「SハDテアル」以上の複雑な形式をもつものも当然含まれてくる。

一方、「存在的」(ontisch) という修飾語句も『イデーネ』第一巻の本文中に一箇所しか出てこない。ここでは、形式的命題論から切り離して取り出された「これらのノエマ的かつノエシ的な形式が相互に結びあったものであると同様に、このノエマ的かつノエシ的な二つの形式は、今度は、存在的な形式と、本質法的に結びあっているのである。この存在的形式は、存在的な諸成素へと目差しを振り向け戻すことによつて把握されうるものである」と言われる (Idea 3/1 S. 362, 第二分冊三一八頁)。ここでもやはり「存在的」という言い回しは命題的なものに関して語られている。さらに注意すべきは「存在的形式」を「ノエマ

的な形式」から明確に区別しているということである。では「オンティッシュなもの」と「ノエマ的なもの」の何処に相違点があるのだろうか。それは「存在の意味」が超越論的還元を未だ被っていないところにある。事実「存在の意味」の語られる文脈では、いっさい超越論的還元は問題になっていない。それゆえに「ノエマ」と「存在の意味」は対応した構造をもつにもかかわらず、その身分は明らかに異なるのである。

さらに、もう一箇所、『イデー』第一巻の補論十一を引いてみよう。それによれば、「意識と存在自体との間に成り立つイデア的連関」を明らかにすることがフッサールによる構成理論の課題であるとされ、この「存在自体」はすべてに「ヒュバルコンティッシュな存在」(hyparchontisches Sein)と言い換えられる(Hua. 3/2, S. 543, 抄訳第二分冊、四六六頁)。「ヒュバルコンティッシュ」は、「存立する、存在する」(属性が主語的存在である実体に)属する「を意味するギリシア語 *στρωγες* を語源とする形容詞であるが、ここでは、認識主観に意識現象的 (bansisch) に由来して「ある」わけではなく、「実際に (wirklich) ある」というニュアンスが示唆されているように思われる。それでは、「実際にある」とはどういうことか。それは、レアルに「ある」かはさておき、認識主観に対して生き生きと与えられており、それゆえもつとも近しいということである。具体的にわれわれにもつとも近しいものとは、言語によって分節され、把握された意味・「存在の意味」にほかならない。すなわち、フッサールが「オン」もしくは「オンティッシュ」と言う場合には、単に意識のみに源を有しない、「客観的」かつ「現実的」(wirklich) な存在概念が念頭に置かれていると考えられる。

『意味論講義』がなされた一九〇八年から『イデー』第一巻が出版された一九一三年までのテキストを利用して「オン」についての手がかりをこれ以上得るのは難しい。ただし、フッサール後期のテキストを前

もつて考慮に入れるにならば、「存在の意味」は『経験と判断』の「悟性対象」や「文化対象」に継続していく概念である。⁽¹⁷⁾ この点をふまえれば、「ノエシス／ノエマ」の問題群に決して解消されてしまわない内容を「存在の意味」はたしかに含んでいるようだ。

総括するならば、「存在の意味」はわれわれにとつての真理のありかである。真理のありかである「存在の意味」はさしあたり「SハPデアル」という形式をもつ「命題的なもの」とされ、そのうえで「真理」は「真ナルモノトシテノ存在」と展開された。「真ナルモノトシテノ存在」とは、日常言語で言い表されている「SハPデアル」以上の形式をも有ちうる「カテゴリー的对象性」、「存在の意味」であり、あるいはその形式としての「単なる存在の意味」であった。『経験と判断』では「存在の意味」は、原的に構成する主観の人格を度外視して他の文脈で生きる「引用文」(Entnahme)⁽¹⁸⁾とされている。その際、「存在の意味」は主観と対象との合致という古典の意味での真理をも超越した「客観性」を有している。このように捉え返すことによつて、「情動言語」⁽¹⁹⁾に留まらない内容豊かな「意味」、開かれた公共的な「意味」を介して人間相互のコミュニケーションが可能となるのだ、ということをも「存在の意味」の導入によりフッサールが基づけようとしていることがわかる。

註

- (一) フッサール著作集 (Husserliana) からの引用は、Hua.のあとに巻数を、ついで頁数を算用数字で記入することに よつて示す。ただし、第二十六巻からの引用は算用数字のみで示す。

Biemel, W., 1950. (Erste Auflage 1913) 『イデー』 I 第一分冊、第二分冊、渡辺二郎訳、みすず書房

Bd. 3/1, 2: *Ideen*. Erstes Buch. Hrsg. von Schumann, K., 1976

Bd. 18: *Logische Untersuchungen*. Erster Band. 1975 (Erste Auflage 1900/01)

Bd. 19/1, 2: *Logische Untersuchungen*. Zweiter Band. 1984 (Erste Auflage 1900/01) 『論理学研究』一〜四

立松弘孝、赤松宏、松井良和訳、みすず書房

Bd. 26: *Vorlesungen über Bedeutungslehre*. Sommersemester 1908. 1986

(1) Willems, K.: *Sprache, Sprachreflexion und Erkenntnistheorie*. Tübingen, 1994. S. 325

- (三) ヘルネは『一九〇六・〇七年冬学期、論理学と認識論への序論』(Hua. 24)と『意味論講義』(Hua. 26)を綿密に分析して、フッサールがノエマ概念を構想するにあたって、認識論と意味論の双方向からアプローチしたことを示唆している。しかしながら、ヘルネ論文では「フッサールが純粹論理学の現象学的・超越論的解明の段階として構想するノエマ的な『意味論』は、日常言語の解釈学的理解への実り多き手がかりとして、同時に正体を現わす」という予告がなされているにすぎず、「存在の意味」の独自性には触れられていない。他方、ゼーツァーは、論文の最後に「『イデー』第一巻への展望」という簡単な付録を設けることにより『意味論講義』と『イデー』とのかかわりを教示している。Bernet, R.: *Husserls Begriff des Noema*, in: hrsg. v. Jisseling, S.: *Husserl-Ausgabe und Husserl-Forschung*, Dordrecht, 1990. SS. 62, 79. Sözer, Ö.: *Die Idealität der Bedeutung in den Vorlesungen Husserls über Bedeutungslehre*(1908), in: hrsg. v. C. Jamme, C. u. Pöggeler, O.: *Phänomenologie im Widerstreit*, Frankfurt a. M., 1989. S. 135
- (四) 対象への関係を「インテンチオ」と称する(143)。

(五) 表現の「対象への関係はスペチエスに帰せられる (Vgl. 35. 6)」。これを「表現の対象性機能」という。

(六) こうしたスペチエスは、意識作用から取り出されうるものということと「意識現象の意味」(phänologische Bedeutung)とも称される。また『意味論講義』において、スペチエスは、現出してくるがままに受け取られたという性質をふまえて「現出論的」(phänologisch)な意味ともいわれる。

(七) 『意味論講義』において、「存在の意味」は「カテゴリー的なもの」、「カテゴリー的对象性」、「命題的なもの」(das Propositionale)、「現象学的意味」と言い換えられる。ただ、本論では、その意味概念の「存在的」という側面に注目するがゆえに、スペチエスに対峙する意味概念を一貫して「存在の意味」とする。

(八) 同音異義語には、もともと異なった意味の数だけスペチエスが対応していると考えられる (31)。

(九) あるいは、スペチエスが「対象自体」と「存在の意味」双方に関係するとも考えられる (Vgl. 143)。 () は引用者の補足。

(一〇) 拙論では *intentionaler Gegenstand als solcher* を「志向 (intention) の方向性を強調して「志向された対象そのもの」と訳出する。

(一一) 「判断の基体となる対象とは、それを構成する名指しの働きがひとつの項としてそこへ入っていく判断定立において、同一的に定立されたものである。そして、統一する意識は、その項においてとまり木 (Stamm) を見いだすのである」(105)。

(一二) 「スペチエス」と「存在の意味」とのダイナミックな関係は、最終的には「意味概念のすべての意識現象的な変化には、存在的な変化が平行している」(Vgl. 144)と表現される。つまり、スペチエス的な表象意味の例だけを先に挙げたが、この例と同じく高次のスペチエスの判断意味も「存在の意味」に平行して維持されることにな

る。原理的に言えば、構成された意味である「存在の意味」があつてはじめて、それに対応する高次のスベチエスが生じることになる。このことは、ここまでの議論から容易に理解でき、以下の議論によってさらに裏付けられることになる。

(一三) 同一性の総合を表す表現の考察が、「判断の基体となる対象」をフッサールが導入する契機になつたとベルネは指摘する(Bernet [1990] ss. 72f.)。フッサールは「イエーナの勝者」と「ワートルローの敗者」がともに同じナポレオンを指すことを例に挙げて、この同一性言明を説明している。なお、次の比較・関係をあらわす例として「川辺の水車小屋」という表現が提示されている。

(一四) 『論理学研究』の「カテゴリー」理解に関して、以下の二著より有意義な示唆を得た。フッサールのカテゴリーは対象的な「存在の構造」であり、認識主観のなかからは生じないのである。Lévinas, E.: *Théorie de l'intuition dans la phénoménologie de Husserl*, Vrin, Paris, 1963. Vgl. S. 169. レヴィナス『フッサール現象学の直観理論』佐藤真理人、桑野耕三訳 法政大学出版社、一九九一年、一六四頁参照。「範疇的諸形式といえども、主観の能動的作用、特に思惟の働きの所産と看做されてはならないのである。」宮原勇『『論理学研究』における普遍認識の問題』、『哲学論叢』XI 京都大学、一九八四年、六三頁。

(一五) 「ノエマ」を素材に絶対視することは避けなければならない。「ノエマの身分がそもそも判然としていないのだ。」Bernet, R./Kern, I./Marbach, E.: *Edmund Husserl. Darstellung seines Denkens*, Hamburg, 1989, S. 94. ヘルネ他『フッサールの思想』千田義光、鈴木琢真、徳永哲郎訳 哲書房、一九九四年、一四五頁。

(一六) 「存在の意味」の内容(領域的存在論に関するもの)を捨象したのが、文法形式(形式的存在論に関するもの)であるところの「単なる(Blosse)存在の意味」である(50)。そして、純粹に、つまり感覺的成素を含まないと

いう意味で純粹に残る形式が純粹論理形式という「カテゴリー的対象性」と称される。その際「SHPデアル」以外にも、「bハaヨリ大キイ」(a < b) といった不等号の関係式や、あるいはより複雑な推論文など諸々の形式が考えられる。

(一七) 『経験と判断』の「受動性―自発性」の関係を「スペチエス―存在的意味」に置きかえて『意味論講義』を説くむらば、このことは明確である(Vgl. Sozer S. 129)。およびフツサル『経験と判断』第五十八節を参照。

Husserl, F.: *Erfahrung und Urteil, Untersuchungen zur Genealogie der Logik*. Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1985. (Erste Auflage 1939) 長谷川宏訳、河出書房新社、一九七五年。

(一八) ゼーツァーによる示唆。Vgl. Sozer S. 126

(一九) カッシーラーによれば「情動言語」は「主観的言語」ないし「動物言語」とも換言され、音声による単なる情動の表出を意味する。「命題言語」が対概念。Cassirer, E.: *An Essay on Man*. Doubleday and Company, INC. New York, 1954. (Erste Auflage 1944) S. 47 カッシーラ『人間』宮城音弥訳 岩波書店 一九七九年(一九五三年初版)、四〇頁。

(追記) 本稿は、一九九六年五月二六日に日本哲学会(於・山形大)での研究発表をもとに執筆したものである。